



社会から見た大学の評価

著者	松本 美奈
雑誌名	人文社会系分野における研究評価 : シーズからニーズへ : 研究大学強化促進事業シンポジウム報告書
ページ	93-99
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155100



社会から見た大学の評価

松本 美奈

読売新聞記者／国立大学法人評価委員会委員

はじめに

皆さん、こんにちは。素晴らしい先生がたの後に控えて、私はとりではなく後から来た前座だと考えてください。皆さんもお疲れになったところでしようから、軽く居眠りをしながら私の話は聞いてもらえると、ちょうどいいです。私は、机間巡視はしません。皆さんの肩をたたくこともしないので、いびきさえかかなければ寝ていても全く構いません。改めまして、私は読売新聞記者の松本美奈と申します。よろしくお願いします。

きょうは、「社会から見た大学の評価」とタイトルをいただきました。私が評価者かといいますと、私は評価者には全く不向きです。ちなみに、この写真は、私の3人の子どもたちです。一番、上が24歳です。一番、下が9歳で、真ん中が8歳です。生産性は極めて高いですが、計画性はありません。全く計算もできない人間なので、評価には不向きです。そのような人間から見た大学の評価について話します。

「評価」について考える

今、大学の評価は非常にたくさん行われています。大学の評価とは何か。何のために行われているか。

まずは、評価とは何か。評価とは、価値や価格を（論じて）決めることです。私は困ったときには、新明解国語辞典を引くことにしています。このかっこ、（論じて）の部分が大事です。大学の価値とは何か。続いて出てくるのが、この疑

問です。もう一つは、このかつこの中がとても重要です。今、お二人のお話に、ディスカッションとコミュニケーションといわれる言葉が出てきました。

果たして、私たちは大学の価値や価格を論じているのか。誰が論じているのか。考えなくてははいけません。お分かりでしょうか。今、評価の中心になるのは国会議事堂や永田町、霞が関のあたりが中心です。今、この人たちが大学改革の名において、大学の価値を一生懸命に論じています。一生懸命という言葉が適切かどうかは分かりません。

論じているかといえば、これもまた疑問です。霞が関、永田町やそれ以外の所では分断が起きています。霞が関と永田町の中でも言葉が通じていません。もう一ついいますと、霞が関や文部科学省の方がいる前で恐縮ですが、研究局と高等教育局、初等中等局は果たして、同じ言語で話しているのかと疑問もあります。うなずいていただいて、ありがとうございます。そこには、さらに小さいワーキンググループがついています。永田町も同様です。

それらは互いにつながっているか。私の推測ですが、つながっていません。分断しています。先ほどの話に戻ります。誰が論じているか。それぞれが勝手に話をしています。ちなみに高校、保護者や受験生、学生などは論じているか。さて。

私は読売新聞記者として、ここ十数年は大学を中心に取材をしてきました。そのうちの11年間は、大学の实力調査を行ってきました。偏差値や知名度ではなく、大学の教育の質で大学を選んでもらいたいと言ってきました。

大学とランキング

きょうは、通訳の方が私に重要な指摘をしてくれました。「偏差値とは、どのように訳したらいいのでしょうか。アカデミックスコアですか。スタンダードスコアですか」と聞かれました。偏差値は、ある母集団の中での位置にすぎません。標準化された点数ではありません。極めてグローバル化しにくい指標です。この偏差値が大学の入り口と、残念ながら出口のところでも使われています。教育の4年間や6年間の質は全く見られることもなく、ランキングです。私は、偏差値をびったりと表わすのはランキングだと考えています。大学はラ

ンキングで評価をされています。

その一方では今、皆さんが言われたように厳密な評価をするべきだ。サイテーションであることや論文の量も研究を測るものとして、きちんと見るべきだとありました。しかしながら、世間はそんなに見ていません。全く見ていないとがっかりされるので、「そんなに」と控えめな言い方をしてみました。ちなみにものの価値の意味でいえば、この大学の实力調査は新聞の後に、このような形で出版をしてきました。2019年度版の定価は、1650円プラス税です。実は、2014年度版をAmazonで見えていたら20万円の値段がついていました。これが世間の評価です。評価は、このようものなのだとよく分かりました。

価格を決めるのは何か。2014年度版はデータも古いし、紙も相当に劣化しているはずですが。しかしながら、そこでつけられた値段＝評価は一体、何を示すのか。いつも私が疑問に思うところです。私がずっと大学の实力調査を通じて、特に高校生や高校の先生、親御さん、企業の方など社会の皆さんに言ってきたのは、ランキングではなくて一覧表のこのデータで大学の現実を考えてほしい。このデータは何も語っていない。語っていないから疑問に思ったら大学に行って見てきてほしいと、それだけを言ってきました。

面白いことに気がつきました。例えば、留年率です。このデータはこのページをたまたまスキャンして、ここに載せたにすぎません。ある大学のある学部のある学年は、35.3パーセントも留年していました。毎年、大体、このぐらいです。退学率は6.5パーセントです。その退学率を入試方法別に見てみると、指定校入試が中心です。指定校入試で入った人の14.3パーセントですから、10人に1人以上はここで退学していました。

この大学は、学費が高いです。ここは薬学部なので6年間ですが、1191万円もかかります。これだけ払ったとしても定職に就くことができないかもしれないのが、この大学の現実です。しかしながら、このように言っても高校の先生がたや保護者の評価は違います。ここの部分は見えてくれません。私は高校や保護者の集まりにも呼ばれるたびに、このような表を見せて、「ランキングではなくて一覧表を見てください」「評価をするのは、あなた自身なのだ」と言っても必ず出てくる言葉はこれです。

「お勧めの大学はどこですか」。

日本においてとまではいいませんが、少なくとも大学を目標としている受験生や高校の皆さんは、印象や風評で望んだとおりの結論を導くことに終始していないだろうか。つまりは、評価はこの程度のもなのではないだろうか。日本には、ひょっとしたら評価文化は根付きにくいかもしれないという仮説を持っています。きょうのテーマとは少し外れるかもしれませんが、このような問題意識を持っている記者であることを頭の隅に入れておいてください。

「評価」の先

評価が悪いとはいいません。けれども、ひょっとしたら思考停止を生む装置として働いているのではないのでしょうか。サイテーションにしても論文数にしても、ひょっとしたら思考停止を生むところに私たちを陥らせているのではないか。そのような仮説を持っています。先ほどの分断です。論じているかといえば、どうなのか。誰が論じているのか。政治家や官僚、経済界、大学などのいろいろな人たちが論じていると感じている気がします、それぞれに都合のいい評価で納得していないだろうでしょうか。

その程度の評価は、レピュテーションといってもいいのか。単なるうわさにすぎないのか。私たちは、その辺ももっと考えなくてはいけません。ここからは大学の皆さんが多いので、命懸けの話をします。きょうは、まともに帰れないかもしれません。後ろからぱっさりと切られてしまうかもしれないですが、言います。果たして、この現状に対して大学は反論しているのだろうか。腹立たしさすら感じています。自分に都合のいい評価は受け入れている。たとえ間違っているも受け入れています。

先ほど偏差値の話をしました。私は、偏差値は大学の何の価値も示していないと考えています。けれども、偏差値が高い大学が、偏差値なんて意味がないといっている言葉を聞いたことがありません。逆に偏差値なんかで私たちの大学は測られたくないといっているのは、いわゆる偏差値が低い大学です。これをどのように捉えたらいいのか。自分の都合の悪い評価は、あいづらは私たちのことを分かってないと、必ず分かっていないといわれる言葉で反論します。

つまりは、望んだとおりの結論を得られれば、どのような評価であってもいい。自分の都合のいい評価であれば満足なわけです。それが今の日本の大学評価にまつわる傾向なのではないか。後でいくらかでも反論してください。私はそのように考えています。その例の一つを申し上げます。大学自身が評価といわれるものをあまり重んじていない。もしくは、評価をなめているのではないかと思ったのは、財務省が出している、国立大学の法人評価に対する批判の文章です。文部科学省の方はよくご存じでしょう。

国立大学は、教育研究の成果を示しなさいといわれています。それに対して国立のある大学は、地域人材育成会議の開催回数を自分たちの成果だと言っているわけです。年に2回の開催をしているから、会議の回数で私たちはA評価だと言っています。言っておきますが、私は財務省の肩を持つために出しているわけではありません。自学の自習施設の増加状況をもって、私たちは教育研究に力を入れていると言っている大学もあります。これもA評価です。

施設をどれだけつくっても、授業を改革しなければ誰も学びに来ません。その当たり前のことが、ここからは抜けているわけです。分かっている言っている可能性もあります。もう一つは、アンケート調査結果に基づく入試方法改善への活用状況です。その調査を年に1回しているのでOKで、私たちは頑張っていますと言っている大学もあるわけです。これが何をしているかのみで、自分たちをA評価だとしている例です。

もう一つは、教育研究とは全く無関係の評価指標を出している大学もありました。例えば、救急車の受け入れ件数やドクターヘリの稼働件数を教育研究の成果の指標として入れています。これは大災害があったら一挙に上がるわけなので、この大学はS評価を出せることになります。恐ろしい話です。病院の逆紹介率の増加状況などと、財務省の肩を持ちたくないような、不思議な評価の仕方をしています。

これも財務省が出しているデータです。仮にA大学としますが、ある教育大学です。具体名は、ご想像にお任せします。ここでは教育の平均スコアで、学生たちの英語力を伸ばしたいとしています。自分たちの目標は500点だと掲げたにもかかわらず、残念ながら445.3点。基準値は450点です。つまりは、基

準すら下回っているにもかかわらず、自分たちはAだと言っています。これは財務省が怒るのも、もっともです。大学の方は、評価を何だと思っているのか。先ほど評価は思考を奪うと言いましたが、このような現実もあります。

誰のための、何のための評価なのか

評価は何のために、誰のためにするのか。どのような結果を望むのか。それを大学の人たち自身がこのようにないがしろにしている、どうして大学に対して温かい風が吹くのか。私には全く理解ができませんが、大学は国にとっての宝物です。頑張ってもらわなければ困るわけなので、評価をすることからは逃れられません。少ないパイを分け合うためには、評価に基づく配分を考えなければならないことは理解します。

大学の価値とは何か。評価は議論して、価値を決めることだとすると、大学の価値とは何か。何のための評価か。それを大学人自身がしっかりと認識をして、議論をして、出していかなければいけません。そのためには、どう考えても人文社会系です。人文社会系からこの議論を起こさないで、誰が起こすのか。私は人文社会、人文科学と自然科学の三つの分類が、果たしていいのかどうかも実は疑問を持っていますが、いまはそれを傍に置いておいて。

人文社会系は、ずっと昔から価値というものと向き合ってきた学問のはずです。人とは何か。生きるとは何か。学ぶとは何か。大学とは何か。ず長い時間をかけて考えてきた学問のはずです。だからこそ、価値とは何か、大学の価値とは何か。評価をもう一度、考えてみようとなぜ、人文社会系から言わないのか。その意味からも、私は筑波大学さんのiMDといわれる評価指標は、質はまだ測れないと言われていましたが、期待しています。

人文社会系から議論を起こしてください。大学の価値や大学の意味、存在意義を今、言わなかったら来年、再来年、10年後は日本の大学の姿は、悪い方に変わっていると断言してもいいでしょう。どうかディスカッションしてください。コミュニケーションを取って、論じてください。それがきょうの私の皆さんに対するお願いです。以上です。ありがとうございました。

人社系から議論を～社会から見た大学の評価

2019年2月15日

読売新聞専門委員 松本美奈

1 評価の現状

「評価」が氾濫

評価：どのぐらいの価値（価格）があるかを見定めること

問題は「何のために」……何に使い、どのような結果を導き出すか
→見定めているか？

わかりやすい（入手しやすい）データを使うのはまだいい方。

印象や風評で、望んだ通りの結論を導くことに終始していないか。

2 読売新聞「大学の實力」調査から

偏差値や知名度頼りではなく、自分の頭をフル回転させて進路を選びとってもらうために、大学の現実を情報提供

*2008年から11年間実施

*退学・留年・卒業率

*入試方法別退学率も

*回答率92%

*ランキングではなく一覧表で公表

大学					入学率に占める比率（％）								
学部・学科名	学部・学科数	定員	4年制学生数	卒業生数	入学率		入学率に占める比率		入試方法別退学率		留年率	退学率	卒業率
					入学率	退学率	入学率に占める比率	入学率に占める比率	入学率に占める比率	入学率に占める比率			
総合学部	2	1030	1021	480	84.6	3.3	10.7	96.8	2.1	10.3	91.7	0.0	
3年制学部	2	470	431	107	81	79.4	6.5	14.0	63.6	1.9	11.8	17.7	0.1
看護学部	9	720	752	991	107	87.9	2.6	8.9	93.2	1.1	10.3	8.8	7.1
経済	2	800	798	177	109	71.2	3.4	10.4	64.0	2.3	36.0	11.7	26.4
教育	11	400	431	118	107	90.7	4.2	5.1	76.4	0.0	4.3	3.3	6.3
人文	1	445	487	124	110	88.7	4.6	7.3	71.0	0.8	0.0	11.1	5.3
芸術	6	610	1030	1071	800	78.6	6.2	10.6	64.2	1.9	12.8	10.1	12.1
体育	1	81	31	38.3	13.6	45.1	37.0	0.0	0.0	42.2	0.8	91.3	0.0
看護	9	400	458	120	109	90.8	3.3	8.9	90.0	0.0	3.1	4.3	10.3
農	8	760	717	81	31	38.3	10.6	48.1	17.0	0.0	42.2	0.8	91.3
経済	2	830	830	130	99	76.2	5.4	18.5	65.2	2.3	4.3	27.1	16.1
総合	2	1700	1030	300	231	77.0	8.3	14.7	66.3	1.0	16.7	16.8	10.7

▲大学の實力2019から

3 大学は反論できるか

例：国立大学自身の評価

- ・「インプット指標」や「無関係な指標」を尺度にしている。
- ・「アウトカム指標」を明示していても、なぜその尺度なのかを説明できない。
→「A評価」「概ね良好」が並ぶ。

4 人社系からの議論を

- ・評価は何のためにするものなのか。
- ・価値とは何か。大学の価値とは何か。

「科学技術」信仰からの脱却

参考：科学技術基本法第1条「科学技術（人文科学のみに係るものを除く）」

ご意見・ご質問をお待ちしています。

mina3939mnk@gmail.com